

現代沖縄の住宅事情

戸嶋 祥子

1. はじめに

今回私が沖縄の住宅について調べようと思ったのは、本土と沖縄の違いが目に見えてわかるものを調べようと思ったからだ。沖縄では風水を信じる習慣が本土より強いということから、民家の造りにも風水が関係していて本土との違いが見られるだろうと思い、住宅をテーマにすることにした。調査の仕方として、新しい分譲マンションのモデルルームの見学、マンションのチラシ集め、住宅会社の人に設計の話进行、実際に民家の中を観察するなどを行なった。

2. 沖縄の家屋の変遷

2.1 伝統家屋

沖縄の住宅を調べるにあたり、まず沖縄の伝統的な家屋について説明したいと思う。沖縄の代表的な古い住宅に、国の重要指定文化財の中村家がある。この住宅は、約 280 年前の代表的な沖縄の農家で、戦前の沖縄の住居建築の特色をすべて備えており、昭和 31 年に琉球政府から、昭和 47 年に日本政府によって国の重要文化財に指定された。中村家は 18 世紀に建てられたもので、建築構造は鎌倉・室町時代の日本建築の流れを伝えるが、各部に特殊な手法が加えられていて、独特な住居建築である。士族屋敷の形式に農家の形式である高倉、納屋、畜舎当が付随している。また屋敷は南向きの傾斜を切り開いて建てられ、東、南、西を琉球石灰岩の石垣で囲い、その内側に防風林の福木(チヨラ)を植え、台風対策にしている。

(1) 屋敷の外観の特徴

ではこの住宅を例に沖縄の民家の特徴を見ていく。まず屋敷内の家屋以外の特徴として、石囲い、ヒンプン(目隠し塀)、アマハジ(雨端)などがある。これらはいずれも本土には見られないものだ。石囲いは他にも生垣、竹垣などの種類がある。石垣の場合、石は低めで厚い外側を丸くし、内側を直角にして積むと良い。

またヒンプンとは中国の「塀風門(ピンフォンメン)」が沖縄に伝わったものである。中国では悪鬼の進入を防ぐための門であったが、沖縄でも悪い気の進入を防ぐための門としてその意味合いを受け継いでいる。また屋敷囲いの入り口は、風水師によって南がよいとされ、その正面に仏壇がくるようにする。これは門口から入った良い気が、祖先を祀っている仏壇に向かうようにするためである。

次にアマハジについてだが、これは屋根が庇状に出張ったもので、強い太陽光線を防ぎ、また雨や霧除けのはたらきをする(写真 1 参照)。しかし風圧が上からかかるため、台風の多い沖縄ではあまり庇の出を深くしない。

(2) 家屋の内側の構造

次に家屋の中の特徴について見ていく。まず沖縄の住宅で特徴的なのはその部屋割りだ。主に使う部屋は三つあって、一番座、二番座、三番座という。それぞれの部屋の機能があり、一番座は客間、二番座は仏間、三番座は居間として使用される。部屋の位置と方角も重要であり、東から順に一番座、二番座、三番座と並んでおり、それぞれ南を向いている(図1参照)。また、祖先祭祀を重要視する沖縄では、家の中での仏壇の位置は重要である。そのため仏壇のある二番座は家の中心にくるように造られ、さらに仏壇は先にも述べたように、風水でよいとされている方角の南を向くように配置される。

また各部屋の後ろに「裏座」という部屋があり、主に女性や子供の寝室や三室などに使用されてきた。

最後に南東に位置する客間の「アサギ」という離れの部屋がある。ここは、昔王府の役人が地方巡視に来た際に、宿泊用として使用していた。

(3) その他の特徴

家の外で、屋敷の北西に位置する「フル」という豚小屋兼便所がある。これは三基連続の石造りである。かつてはここで家畜の豚を飼っており、その豚が人間の排泄物を食べるという便所の機能を果たしていた。この習慣もまた中国から伝わったものである。

次に、台所に祀られているヒヌカンという火の神様も沖縄独特の信仰である。これは女性の神といわれ、この中村家が使われていた時代から現在まで受け継がれている。



写真1 アマハジ



図1 伝統的な沖縄住宅の部屋割り

2.2 沖縄風水の歴史

沖縄の住宅の構造は風水抜きでは説明することができない。沖縄は中国文化の影響を強く受けているが、風水もまた中国から伝わったものである。

1700年代、首里王朝は多くの人物を派遣し、中国の風水を学ばせた。琉球王府にもまた、フンシミーといわれる風水師がいた。当時最も有名だった風水師の蔡温は、首

里城に風水的意味を与え、その後風水を利用して村落開発と農地改革を行った。その集落の形は、四神相応¹⁾を表した地理風水の理想型だった。

沖縄において家の造りはその後の人生、子孫にも影響するほど重要なのであるため、沖縄では家を建てる時に「フンシミー」と称して、方角や位置が吉かどうかを見る。良い地形は後高前低の地形である。これは腰掛に座って体が楽なように、という状態を表している。さらに後方が北、前方が南であるのが理想的だ。これは北風が入らないようにするためだ。また、門口から入った福が溜まるので、屋敷の後方が広い地形もよいとされている。方角については、沖縄では太陽が昇る東がよい方位（アガリ）、西が悪い方位（イリ）とされている。

2.3 人間の一生を象徴する伝統的な部屋割り

沖縄の家屋の部屋割りは、人の一生を象徴する造りになっている。まず、子供は北側の部屋を寝室などにして使い、結婚すると二番座に移り、自分の子供が結婚すると一番座に移る、というように使う部屋は年齢によって移っていく。これは方角で表すと、子供のときは生活空間が北にあり、年齢を重ねるごとに南、特に南東に移動していくということがわかる。ここからわかるのは、南が一番公的な場で、中でも南東が一番神聖な場だということだ。それに対して北は私的な空間、特に北西はもっとも劣位の方角である。

そしてこの部屋割りは、男女の位置関係に対応している。図2を見ると、北西に女性の場である台所がある。それに対して南東、南には男性の場である客間がある。このように、よい方角には男性の生活空間が、悪い方角には女性の生活空間がある。さきに述べたヒンプンも男女は左右別々に入ることになっており、それぞれの空間へと分けられるような働きもしている。

このように民家の部屋割りから、男女の優劣の位置関係も見えてくる。

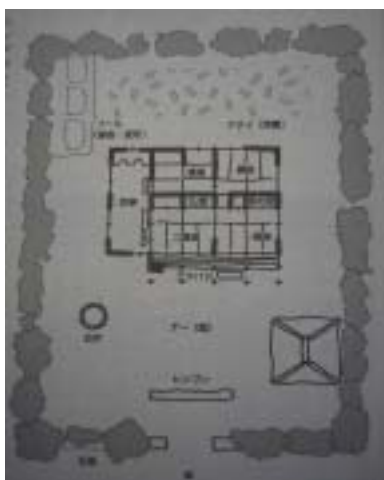


図2 間取り



図3 男女の優劣関係

2.4 木造からコンクリートへ

沖縄の住宅が現在のような住宅の造りになったのは戦後に米軍の影響を受けてのことだ。その流れは次のようになっている。

米軍の敷地内に鉄筋コンクリートの建物が次々と建つ。

1959(昭和34)年に相次いだ大型台風は、死者25人、家屋倒壊の被害を出した。

しかし基地内の建物は台風被害を受けなかった。

の状況を見て、沖縄の住民は住宅に鉄筋コンクリートを取り入れることにした。また、木造住宅はシロアリに弱く、その被害を防ぐことも当時の課題だった。さらにコンクリート住宅造りを後押ししたのは、木造家屋よりも長い住宅資金の貸付だった。木造家屋の貸付最高年限は15年、コンクリートの家屋は20年だったからだ。当時は台風対策のためにどうしてもコンクリートの住宅を作る必要があったため、長期の貸付は当時の要望に応えるものだった。

しかし、コンクリートは熱を吸収するため、沖縄の気候にあまり適していないという問題点もある。そのため最近では、伝統家屋の欠点を見直した木造住宅が再び増えてきている。

2.5 戸建て住宅の外観の特徴

平らな屋根で、ブロック型のものが多い。柱梁はコンクリート、壁はコンクリートブロックのものが多い。そして白い家がほとんどである。これは暑い気候のため、熱を吸収しないようにするためだ。2、3階建てが多く、一階が車庫で車が2、3台入るつくりがほとんどだ。これは、沖縄は電車がなく、車の所持率が高いことが関係している。

次に台風対策として次のことがあげられる。

小規模な敷地。

塀で囲む。塀と家をあまり離さないように建てて、防風効果を上げる。

地域によっては敷地内を掘り下げるか、床を低く造ることで、結果的に屋根を低くする。

鉄筋コンクリートで強度を増す(白蟻対策も兼ねる)。



写真2 戸建ての住宅



写真3 戸建ての住宅

写真 2、3 からわかるように、沖縄の家は屋上がある。そこで洗濯物を乾かしたり植物を置いたりしている家がたくさん見られた。

2.6 地域ごとの特徴

まず那覇市の特徴だが、平屋はほとんどなく、大体が 2、3 階建てである。久米、おもろまちといった市街地の北の新都心エリア人気がある。新都心では、マンションや分譲住宅の建設ラッシュで、次々と新しい物件ができているために新しい物件を探すにはお勧めのエリアといえる。しかし一方で、新しい住宅が多いために個性が薄れて沖縄らしさに欠けるという面もある。

次に首里の特徴だが、ここはかつて王朝があったため落ち着きのある町並みを残している。つまり、那覇に比べて比較的昔からの住宅が多い(写真 4 参照)。

那覇市の北に位置する浦添市は、那覇より交通の便がよく、住みやすい土地である。なかでも国道 58 号線付近の人気が高い。



写真 4 首里の古い住宅

3. 戸建て住宅：T 家を例に

今回のフィールドワーク中に、浦添市の T さんのお宅を訪問し、実際の民家の中を観察することができた。

T 家の家は、夫の親戚が 20 年前に設計したもので、T 夫婦が要望を出しながら造ってもらったようだ。また、一階はアパートとして貸しており、二階を居住スペースとしている。間取りで特徴的だったのは玄関が南向きであることだ。玄関の西向きは絶対いけないという知識はやはりあるようだ。また、座敷の部屋には、今は物置だが後に仏壇を置くためのスペースが確保されている。

また、ヒヌカンも実際に見ることができた(写真 5 参照)。T 家では毎月 1 日と 15 日に線香をあげている。その匂いで子供たちも今日はヒヌカンの日だとわかって起きてくるようだ。このヒヌカンは仏壇よりも身近な存在で、毎日のことを報告する。心のよりどころのような存在だ。これに対して仏壇は、一年の中で行事のときなど特別な日にしか扉を開けず、それほど身近な



写真 5 T 家のヒヌカン

存在ではないという。

またヒヌカンは女の神であり、娘に灰を分ける。実際T家でも代々女性の子供に灰を分けているそうだ。そして知り合いの家もほとんどがヒヌカンをやっているそうだ。

4. 分譲マンション

最近の沖縄は、新都心を中心にマンションが増えてきている。マンションに入居する人は、1世帯で4、5人の家族が多く、2世帯での入居はほとんどない。また年輩の夫婦か一人暮らしで借りる人もいるそうだ。やはりマンションは土地が限られているため、沖縄独特の部屋割りや部屋の向きの傾向はほとんどない(写真6参照)。



写真6 分譲マンションの間取り図

4.1 本土の住宅会社

最近のマンションは、本土から来た住宅会社が売っているものがほとんどである。そのため沖縄だからといって本土のマンションとの違いはほとんどなく、どちらかというとならぶ都会的な造りになってきている。また、沖縄の住宅の特徴であった仏壇をマンション内に置いている人はほとんど見かけないという。また入居時に仏壇の方角などを気にする人もほとんどいないそうだ。しかし、リビングを広くしてほしいという要望は多いという。これは、行事の時には親戚が大勢集まる沖縄の習慣のためだと考えられる。

一方マンションの中のフロアを観察してみると、玄関前にシーサーの置物を置いている部屋がいくつかあった。これは、部屋の間取りはマンション側によって決められていてどうしようもないが、魔よけのシーサーを置くという古くからの習慣は沖縄に人に受け継がれているというあらわれであると言えよう(写真7参照)。



写真7 マンションの玄関前に置かれるシーサー

4.2 沖縄本社の住宅会社「環ハウス」

本土から来た住宅会社について述べたが、沖縄本社の住宅会社の意見はまた違うのもであった。この環ハウスは、本土からの移住者向けでなく、沖縄本島に住む人向けに住宅を造っているという。つまり、住宅会社によって入居者のターゲット層がある程度傾向があるということだ。

また環ハウスが戸建て住宅を造る場合、南東に仏間、仏壇は南向きになるように設計し、座間や仏間についての知識がしっかりしていた（写真8参照）。そのほかにも、沖縄の湿気に対応するために、マンションの部屋をすべて角間にするよう設計しているようだ。

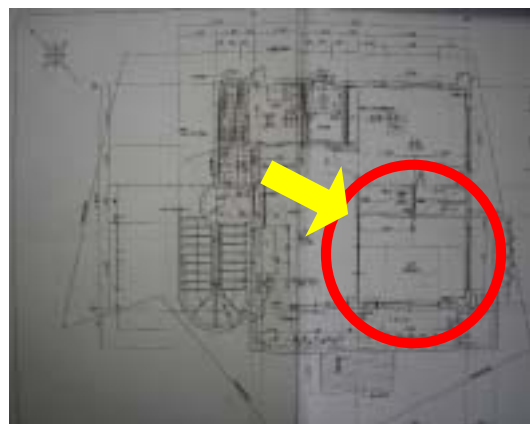


写真8 仏間が南東に位置している環ハウスの設計図

また、ここでは客の要望も他の住宅会社と違っていた。たとえばマンションでも長男家族は仏壇を置きたがる、仏間の位置を気にするなど仏壇に関する要望は全客の過半数であること、また、リビングは広くしてほしいなどだ。これは、たとえ同じような要望を客が出しても、会社側に沖縄の習慣についての知識があるかどうかによって受け止め方が違うということではないだろうか。または、やはり客側が住宅会社を選んで要望を出しているのかもしれない。

いずれにしろ、本土から来た住宅会社と沖縄本社の住宅会社には違いがある、ということがわかった。

5. 不動産事情

最後に沖縄全体の不動産事情について触れておく。沖縄本島には賃貸物件は豊富にあるが、離島は少なめである。住宅の借り方としては、沖縄県以外の人々が沖縄で物件を借りる際には、沖縄に本籍を持つ人の保証人を要求されることが一般的だ。これは部屋を借りたまま無連絡で本土に帰ってしまう人が多いためだ。本土の人を対象にしたセカンドハウスやリゾート物件などは、沖縄住民を対象にしたローカル物件よりも高くなっている。

沖縄は小さい島である上、都市部に人口が集中し、アパートやマンション住まいが多いため、持ち家率は全国に比べて低い。昔は家族や親戚が同じ集落に住み、結婚したら土地を分けて家を建てるが多かったが、現在では核家族化が進み、借家住まいをする世帯が増えたからだ。

現在の借家の平均家賃は3万6702円（1998年）であり、本土よりも安くなっていることがわかる。2DKの物件は、那覇市で5.5万円から十分探せる。北部では5万前後で借りられる一戸建てもある。このように、沖縄の不動産事情は本土と違って独特なものである。

No.	Room	Price	Agent
19	2D	3.2	...
4	2D	3.5	...
3	2K	3.5	...
15	2D	3.8	...
11	2D	3.7	...
2	2L	4.0	...
24	2L	4.0	...
12	2L	4.0	...
13	2L	4.3	...
5	2D	4.5	...

No.	Room	Price	Agent
8	3L	4.9	...
10	3L	5.5	...
0	3L	5.5	...
2	3L	5.5	...
1	3L	5.7	...
8	3L	5.7	...
8	3L	6.0	...
1	3L	6.0	...

写真9 不動産屋の賃貸情報

6. まとめと考察

今回沖縄の住宅を調べてみて、外見的特徴はやはり沖縄の特徴が見られたが、その内部の構造は戸建て、マンションともにあまり多く残ってはいないと感じられた。コンクリート造りという外見的特徴は、沖縄の気候風土とも関係して、今後も造り続けられていくのだろうと思う。しかし沖縄風水を受けた伝統的な間取りは、今後本土からの新しい住宅会社が増えるにつれて、ますます減っていきだろう。しかし今回の調査では、環ハウスのような沖縄の住宅についての詳しい知識を持った住宅会社も発見することができた。また、住宅を見せていただいたTさんや、話をうかがった沖縄の方々など、沖縄の風水についての知識を少なからず持っている人がいることから、住宅構造はまだ完全にはなくならないだろうと思う。

注

1)東に流水のあるのを青龍、西に大道があるのを白虎、南に窪地があるのを朱雀、北に丘陵があるのを玄武とする、官位、福祿、無病、長寿を併有する最も良い地相。

参考文献

野村浩也(1989)「女性の性的優位の諸相：琉球諸島の事例を中心に」『内発的発展論から』鶴見和子先生退職記念論文集編集委員会
三浦國雄・渡邊欣雄(1994)『風水論集』凱風社
住宅情報誌『週刊かふう』(vol.54)琉球新報社